

見る 思う

芦屋大学サッカー部監督 金 相煥さん



スポーツで学校と地域をつなぐ

すべてがゼロからのスタートだった。阪神・淡路大震災が起こった1995年、プロサッカー選手を引退し、地元の神戸に戻ってコーチの道歩み始めた。

また震災復興が始まったばかりの大変な状況で、サッカーどころではなく、だれもが毎日を生きていくのが精いっぱい。それでも、少しずつでもサッカーに取り組める環境をつくらせ走り回った。

サッカーコーチとしても、競技環境の整備が十分でないところから始めることが多かった。振り返ると、周りの協力を得ながら一つひとつ積み上げたこの時の経験が、後のサッカー指導のスタイルや今の自分の生き方の原点につながっている。

98年に神戸朝鮮高級高校、姫路独協大学とさまざまな現場で指導する機会に恵まれたが、どの現場もゼロの状態だったりで、チームや組織を基礎からつくり上げなければならなかった。

2007年、高校時代にお世話になった先生の紹介で、芦屋学園でサッカーの指導を任されることになった。教員として赴任してからは、サッカーを通して学生（人）を育て地域に貢献できるよう、日ごろからさまざまな「サッカー形態」を模索するようになっている。

芦屋学園の創始者、福山重一先生が提唱した「人それぞれに天職に生きる」に留って自分の個性を生かし、自分に合った職を見つけることがセロを1に、さらに進化させる力にな

ると信じて指導に活用してきた。

また、今や世界の主流で、日本サッカー協会が掲唱している「一貫指導体制」の育成システム構築を念頭に置き、日々取り組んできた。

就任からの10年で、芦屋大学を頂点に芦屋学園高校、芦屋学園ジュニアユース、そして芦屋学園サッカースクールを立ち上げた。芦屋近郊のサッカー少年が大人になるまで一貫指導を受けられる体制を整えた。

昨年10月には、地方創生の一環として芦屋市と包括的連携を結ぶ大学グラウンドで地域イベントを催した。大学サッカー部員らが企画運営を担いサッカー大会、ダンス公演、障害者スポーツ体験、キッチンカーによる飲食スペース提供などを行った。市民ら延べ千人が訪れてにぎわった瞬間を目にすることができた。

そして、この冬にあった第101回全国高校サッカー選手権大会では、芦屋学園が念願の兵庫県代表として初出場を果たし、歴史を塗り替えることができた。

指導者人生の階段を歩む中、たくさんさんの経験を積み上げた結果、1段が百段となり、千段となるよう着実に上っていきたく思っている。

今後、中学運動部活動の地域移行などを踏まえ、今以上に学校と地域をつなぐことを意識したい。しっかりとした青少年育成システムを構築し、サッカーだけでなく、すべてのスポーツ環境の発展に貢献できるように、尽力していきたい。

きむ・さんふあん 1969年生まれ。神戸市東灘区在住。御影高、

東海大学、ガンバ大阪でプレー。神戸FC、姫路独協大学などでコーチを歴任。芦屋大学臨床教育学部准教授。日本サッカー協会S級コーチ。